

平成28年度
全国マンツーマンディレクター会議



①マンツーマン推進の目的について



発育・発達段階に応じた適切な指導で選手をより高いレベルへ導く

子どもたちがよりバスケットボールを楽しみ、打ち込める環境を作る

日本全体の競技力を向上させる



「プレイヤーズファースト」を尊重し、
目先の勝利に捉われない長期的視点に立った指導の推進

- ・ 1対1でバスケットボールを楽しむ。
- ・ 個人のスキルアップを図る。
- ・ 状況判断力、理解力を高める。
- ・ 想像力を養う。



- ・ 強力な1対1の突破力、得点力のある選手が育つ。
- ・ ディフェンスで相手を止められる選手が育つ。
- ・ 高い運動能力を持ち、オールラウンドに活躍できる選手が育つ。
- ・ マンツーマンディフェンスの強化により、将来的なゾーンディフェンスの活用を含めた総合的なディフェンス力の強化が実現する。



- ・ バスケットボールを楽しむ選手が増える。
- ・ 世界で活躍できる選手が増える。
- ・ 強い日本代表チームができる。

- ・世界の強豪国では16歳以下のゾーンディフェンスを禁止しており、国際バスケットボール連盟（FIBA）もミニバスでは禁止している。
- ・日本では、ミニ（U-12）のチームの多くがゾーンディフェンスを導入しており、中学校（U-15）のチームの多くがゾーンディフェンスを中心に試合を組み立てている。
- ・15歳まではコーディネーショントレーニングや基礎的なスキルを学ぶべき年代であるが、ゾーンディフェンスというシステムを主に指導されるため、オフェンス、ディフェンスの両面において1対1の対応力が不足している。

- 小学生、中学生を対象とした施策であるため「指導者のみならず、保護者への理解」が必要であること
- 成長段階にある子どもたちが対象になることから、「体力や技術不足により起こる違反行為」については、配慮が必要であること



上記の2点については常に念頭において、
施策の実行に当たること

②マンツーマンディレクターの役割・推進体制について

マンツーマンディレクターについて①

マンツーマンディレクターの設置目的

- ・都道府県内においてマンツーマンの趣旨や導入目的を指導者および選手に浸透させ、子供たちのためにより良い競技環境を構築すること。
- ・日本全国において一貫した基準でのマンツーマンの推進を行うこと。

マンツーマンディレクターの資格要件

- ・バスケットボール競技特性を熟知し、以下の役割を担える者
- ・JBAコーチライセンス保有者（C級以上が望ましい）

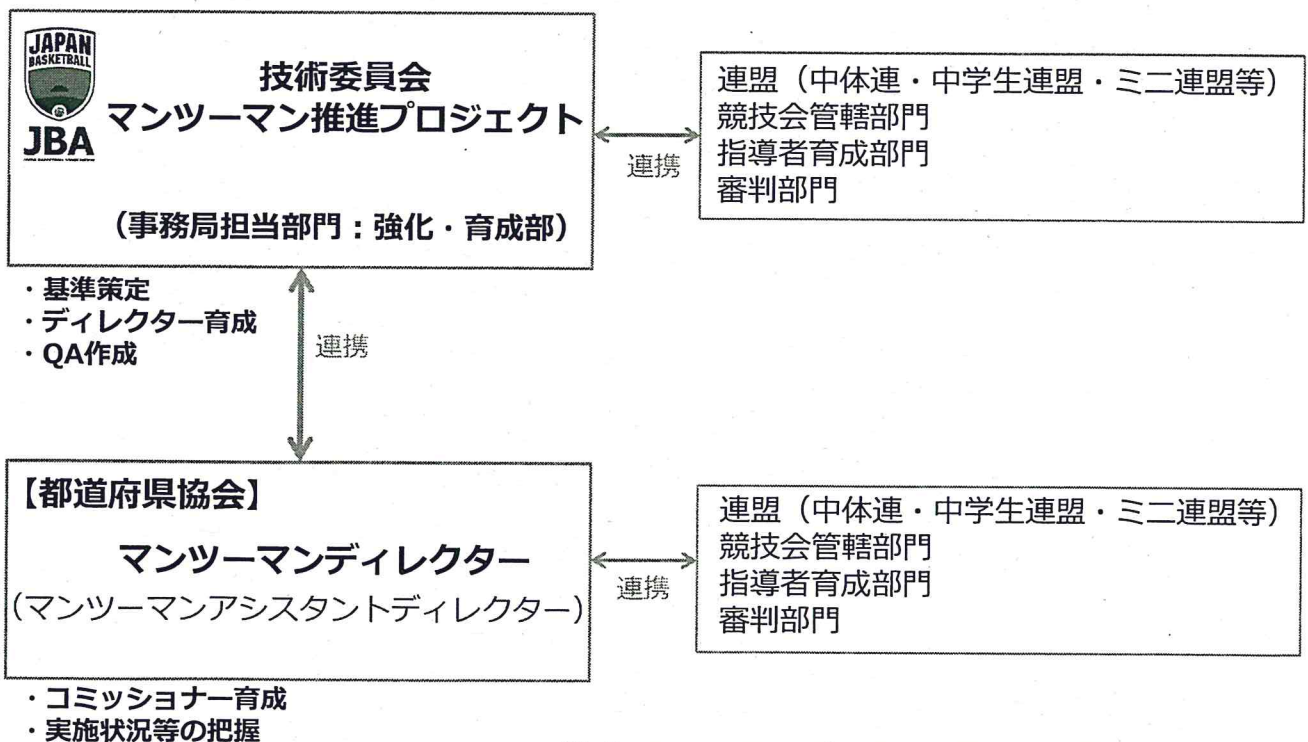
マンツーマンディレクターの主な役割

- ・ 都道府県協会において、マンツーマン推進の中心的役割を担う。
- ・ 都道府県内において、マンツーマン推進の趣旨、導入目的を指導者および選手等に伝達する。
- ・ 都道府県内において、マンツーマンを推進するための講習会を企画・立案し、指導者およびマンツーマンコミッショナーの育成・強化を図る。
- ・ JBAおよび都道府県内の関連団体（中体連、中学生連盟、ミニ連盟等）と連携し、情報発信・収集を行うとともに、円滑なマンツーマンの推進を図る。
- ・ （必要に応じて）アシスタントディレクターの養成を行う。

その他

- ・ 都道府県協会とJBAとの窓口を一本化するためにマンツーマンディレクターは各都道府県協会1名としますが、各協会においてディレクターの補佐を行うアシスタントディレクターを設置していただいても構いません（人数制限も行いません）。各都道府県の状況に応じて円滑な推進が可能な体制の構築をお願い致します。

マンツーマン推進体制について



※旧「マンツーマンディフェンス推進委員会」は、組織再編に伴い、技術委員会傘下のプロジェクトとして設置

● 構成

プロジェクト長：山本明（技術委員会副委員長、ユース育成部会会長）、
委員：小倉恭志・若山暁・松澤年紀（中学生連盟代表）、
永井一彦（日本中体連バスケットボール競技部長）、
坂本昌彦（ミニ連盟代表）、
村上佳司（ユース育成部会）、西垂水栄作（指導者養成部会）
蒲健一、飯塚剛（審判代表）
指導グループ：トーステン・ロイブル（男子ジュニア専任コーチ）
牧野広良（ユース育成部会WG・ミニ連普及技術委員長）
オブザーバー：田口智靖、青柳彰（中学生連盟）

● 主な役割

プロジェクト：マンツーマンを全国に普及・推進するにあたっての
基準・ルール策定、全国における実施状況の確認、教材作成等

指導グループ：技術面に関する問合せの対応、ディレクター、コミッショナー
養成・指導への支援（派遣含む）等

● 連絡窓口

JBA事務局 強化・育成部（担当：川島、関根）
TEL 03-4415-2020 FAX 03-4415-2020
MAIL u15mandf@basketball.or.jp

③ 実態調査結果について

成果 (1) オフェンス

資料3 参照

- いい動きが見られるようになった
- スクリーンを多用するようになった
- スペーシングの取り方の理解、1対1の強化につながっている
- 積極的に1対1をしようとするプレーへの意識変化あり

成果 (2) ディフェンス

- 各指導者の勉強意欲が高まり、ディフェンスの意識が高まっている
- 各チームの意識はかなり変わり、マンツーマンでしっかりディフェンスをするという徹底ができてきた

成果 (3) 運営

- 明らかなゾーンディフェンスはなくなった
- 大会中の全試合で1回も旗が上がらなかったチームを表彰しようとする動きあり
- マンツーマンに全チームが取り組んでいる
- 全チームのコーチが快く対応しゲーム中の修正ができる。
- 「ペイントエリアで立っているだけのゾーン」「スローインで直ちにボールを奪うゾーンプレス」がなくなり選手個々の攻防が多く生まれ、ゲームの質は良くなった
- 今まで見過ごされてきたビッグマンも頑張らせようとするチームが増えてきた
- 大きな選手同士がオールコートで1対1を行う場面が増えた
- ミニ・中学の間で県全体でマンツーマンを理解しようという連携あり

成果 (4) 指導者

- ・ マンツーマンをきちんと指導しよう、指導したいという気運は高まっている
- ・ 基礎技術に目を向ける指導者が増え、指導について学ぶ姿勢が向上した
- ・ 守り方攻め方をディスカッションする場面が増えた
- ・ 実施の意識は指導者始め選手にも確実に浸透してきている。今後も実施徹底を図っていきたい
- ・ 指導者はゾーン対策を考えなくて良くなり、個人技術向上のために時間を使える

課題 (1) 運営面

- ・ ルール策定
- ・ 組織化・予算
- ・ ミニ・中学・レフリー連携
- ・ 大会運営
- ・ 外部指導者・専門外顧問

課題 (2) コミッショナー育成

- ・ 赤旗の対応
- ・ スケジュール
- ・ 現場の課題
- ・ ミニと中学の基準
- ・ コミッショナー育成方法論

課題 (3) ディフェンス

- 現場の課題
- ハーフコート
- フルコート
- 1～6年生混在
- トラップの解釈

課題 (4) オフェンス

- アイソレーション
 - 能力の高い選手に1対1をさせることの増加
- オフェンス側の課題
 - シュート力がない
 - 動かないオフェンスで守られる
 - 個々のスキルアップの前に戦術で解決しようとする

課題 (5) 指導者教育

- 目的意識の欠如
- 規則の抜け道
- 専門外顧問
- 周知不足・理解不足
- 勝利至上主義

☆ コミュニケーションを増やせば目的が達成される!!

↓
マン/ーマンも推進する

課題 (6) 保護者教育

- 意識付け・理解を求める必要性



**バスケットボールで
日本を元気にします!**

